

第十一日目

師 範：中国の大帝国唐は618年に建国されて、907年にほろびます。



日本からの遣唐使も7世紀から8世紀にかけてはひんぱんに送られましたが、9世紀になるとわずか2回しか行っていません。

遣唐使というのは、奈良時代以前がもっともさかんです。つまり律令国家を建設するときに多くを学んだということですね。

ひきついで奈良時代もさかんだったけれども、平安時代になるとあまりさかんでなくなったのです。

唐も275年も過ぎるとおとろえはじめていました。商人からもそんな唐のようすが知らされていました。

そこで危険をおかしてまでも行くことは無いのではないかという考えが出てきた。そこで菅原道真は、遣唐使の廃止を提言し、ゆるされました。

予想通り、894年に遣唐使を廃止してから40数年後に唐はほろびました。唐の文化にたよったり、まねたりするよりも、日本独自の風土にあった文化が好まれるようになります。

国風の文化といわれますね。905年に紀貫之(きのつらゆき)によって編まれる「古今和歌集」の世界は、このころの感覚を反映しています。

奈良時代には日本自生の萩や中国からの梅がよく歌われていますが、古今和歌集では桜が歌われるようになりました。

これも日本的なものへの変化といわれます。

894年 遣唐使が廃止された。

この年を覚えましょう。

コン太：お父さんは

「遣唐使廃止の世話やくよ」

と覚えたそうです。



ペン太：お母さんは

「白紙にもどす遣唐使」

と覚えたそうです。ぼくは、



「道真は九死に一生を得た」

としました。「は」は8、「きゅう」は9、「し」は4、これで894。

遣唐使の大使に任命された菅原道真は、船旅の危険をおかすことなく命拾いをしたということです。

師 範：なかなかよく勉強してつくったね。

894を「白紙」と読むのは、その意味とぴたっと合っていて、よくできています。別の読み方を考えるのは大変です。

その点で「九死に一生を得る」という慣用句を見つけたのは、よかったね。

